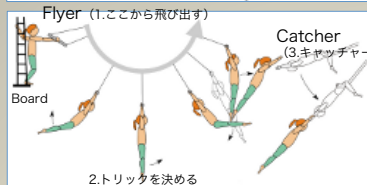
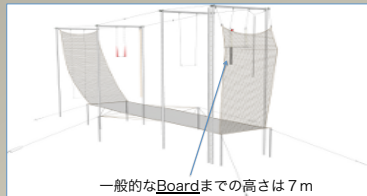


アマチュアスポーツとしての空中ブランコにおける外傷および安全性 に対する取り組み

Injuries from the Flying Trapeze as an Amateur Sports and the Approach to Safety
聖和病院 整形外科 京文靖

空中ブランコとは (Flying trapeze)

- 1859年フランスにて発祥 伝統的サーカス演目として認知。
- 1980年代にアマチュア向けスクール、リゾート施設などで流行し世界で200以上の空中ブランコスクールが存在している。
- 2011年国内初の空中ブランコスクールが開設。



一般的にはFlyerが1.5往復する間に
様々なトリックを決めCatcherに飛び移る。



基本的なトリック〜からサーカスショーで行う難易度の高いものまで100種類以上のトリックがあり、能力に応じて順番にマスターしていく。1つの技をキャッチできれば次のトリックに挑戦する。
振り子の力を利用してタイミングを合わせれば、未経験者でもダイナミックなトリックを行える。

空中ブランコでの様々な役割

- Flyer** Boardから飛びだし様々なトリックを演じる。主にアマチュア、初心者にはボードから飛びだしトリックをきめCatcherに飛び移るまでを一連とし様々なトリックに挑戦する。

- Catcher** Boardの反対側でブランコを漕ぎタイミングよくFlyerを掴む
- Line** Flyerの演技をセーフティラインをコントロールすることにより安全を確保、トリックの補助
- Board** Board上でのFlyerの補助

主にスタッフが担当

目的

- 空中ブランコはサーカスショーなどで見て楽しむものとされていたが、近年アマチュアスポーツとして人気があり、国内でも2施設の空中ブランコスクールが開校されている。
- 一般には認知されていないこのスポーツの競技人口や安全性を検証するため国内外数施設にアンケート調査をおこなう。

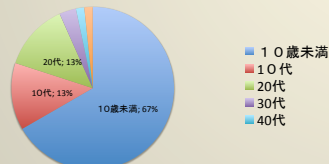
方法

- 国内外5施設にアンケート調査を依頼
競技人口 (スポーツ人口、性別、年代)
競技中に発生した外傷例
安全性に対する取り組み

結果

- 国内3施設、国外1施設より回答 (合計4施設)
1) スポーツ人口について
各施設 1000人〜3000人 /年
2) 競技人口 (概ね1回/月以上) 20〜70人

年代別スポーツ人口

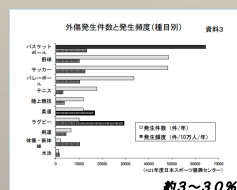
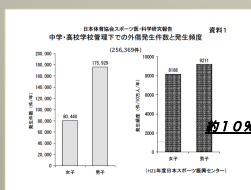


20歳未満の比率は多いが体験目的が多い
ただし、40代、50代にリピーターは多い

考察

- 世界で約200カ所以上の空中ブランコスクールが存在し、現在国内に2カ所のスクールが存在している。
(Alastair Pilgrim the fundamentals of flying trapeze)
- 日本でのスポーツ人口は5000-6000人、競技人口50-100人と推測される。
- 他のマイナースポーツの競技人口(国内)
 - サッカー953万人
 - 陸上174万人
 - 柔道60万人
 - セバタクロウ5000人
 - カバディ2000人
 - 近代5種100人

2014 徳川財団 スポーツ白書



- 今回アンケートを実施した施設での外傷発生率は2〜3%と推測される。
- 頭頸部外傷の報告はなく、骨折例が散見されるのみであった。
- サーカスとしてのイメージから空中ブランコは一般的には危険と考えられがちであるが、スクール施設での外傷の発生率は低く安全度が高いと考えられた。

まとめ

- 今回行ったアンケート調査の結果、競技中の外傷としては四肢骨折や皮膚挫傷などは散見されるのみで、頭部外傷や頸椎損傷などの重篤な事例のない、安全性の高いスポーツであると考えられた。
- 安全に対する一定のルール作り (設備の安全基準、メンテナンス、スタッフの教育システム) を行い、より安全に空中ブランコが出来る環境を整備する必要があると考えられた。